

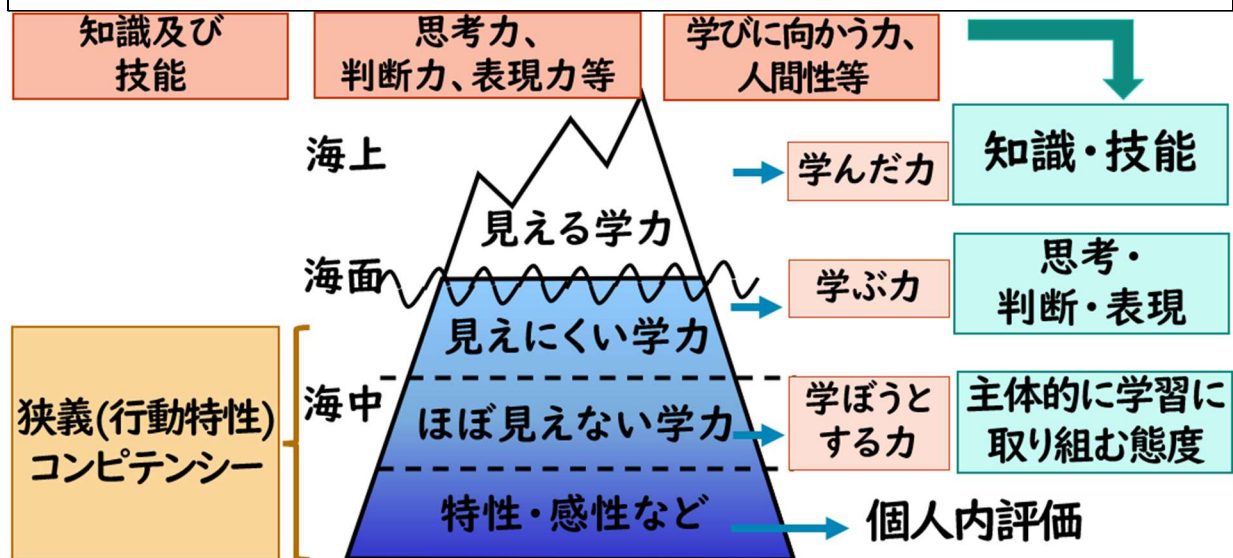
第6章 探究×進路・キャリア

1. 探究を通して高められる資質・能力

学習指導要領(文部科学省)では、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指すに当たって、「知識及び技能」の習得と「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養という、資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できるように学校の教育活動を進めることを示しています。各教科における観点別学習状況の評価の観点は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」に整理され、小学校から中学校、高等学校、大学まで指導と評価を一体化した教育が行われています。

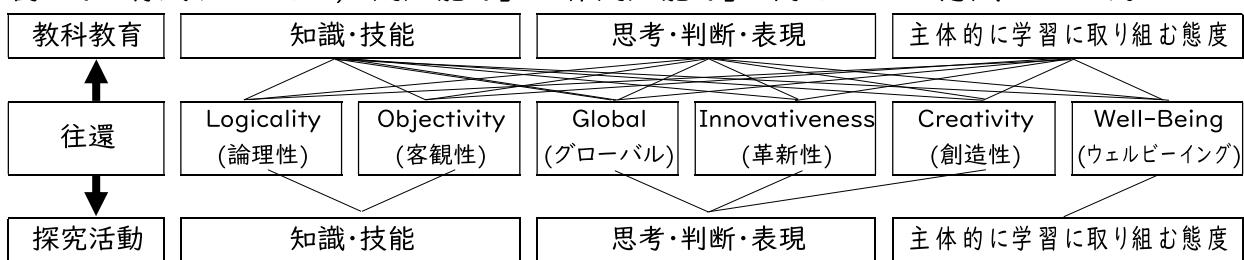
観点別学習状況の評価の観点

- 知識・技能 「何を知っているか、何ができるか」
 - 思考力・判断力・表現力等 「知っていること・できることをどう使うか」
 - 学びに向かう力、人間性等 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」
- 主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など。



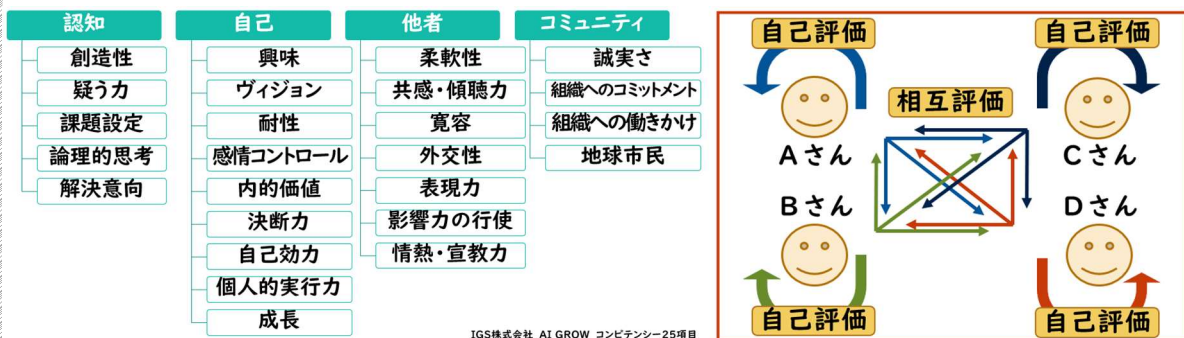
Spencer & Spencer, 1993 確かな学力「冰山モデル」梶田叡一 改変

「確かな学力」の冰山モデル(梶田叡一)に示すように、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」のようにテストや検査をして測定、数値化しやすい資質・能力を「認知能力」と称するのに対し、「学びに向かう力、人間性等」のように測定、数値化しにくい資質・能力を「非認知能力」と、称することもあります。どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかを考えるうえで、探究活動は中核的な時間になるでしょう。UTO-LOGIC を駆使して新たな価値を創る力を育成するために、「認知能力」と「非認知能力」を高めることを意識しましょう。



2. さまざまな場面を通して高めたいコンピテンシー

コンピテンシー (Competency) とは、優れた業績や成果を生み出す個人の行動特性 (David McClelland) を指します。コンピテンシーは、資格、知識といった認知能力だけでなく、協調性や責任感、リーダーシップといった非認知能力も含まれます。スキル (後天的に習得する専門的な知識や技術) やアビリティ (先天的に持っている才能や、後天的に身につけた能力そのもの) を成果につなげるための行動特性や、その行動の背景にある思考パターンを指すコンピテンシーは、「繰り返し観察できる行動傾向」として扱うこともできます。Ai GROW (IGS 株式会社) は、気質診断と自己評価に他者評価を組み合わせて、行動データからコンピテンシーを推定する仕組みです。気質診断は、潜在連合テスト IAT (Implicit Association Test) から Big 5 Factors という性格分類 (繊細性, 外向性, 開放性, 協調性, 自律性) をするもので、さほど変わらない個人の性格を表しますが、コンピテンシーは、意識することで成長させたり、変えたりすることができる行動特性です。



Ai GROW で計測できる25コンピテンシー

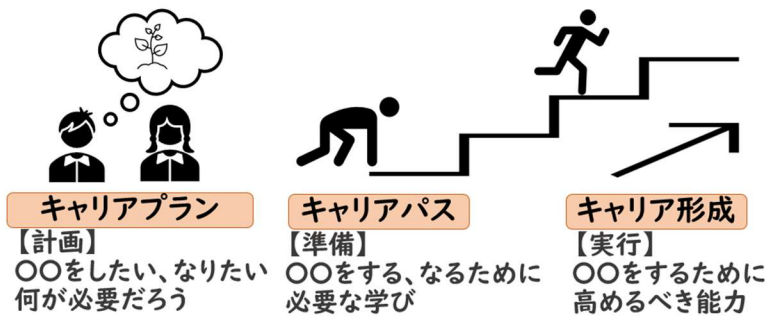
認知	課題設定	状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力
	解決意向	課題を解決するために必要な計画や方法を自ら具体的に立案しながら取り組むことのできる能力
	論理的思考	道理や筋道に即って物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力
	疑う力	他者の意見をそのまま鵜呑みにすることなく、必要に応じて建設的な反論をすることのできる能力
	創造性	自分ならではの独自性に加えて、実現可能な生産性を伴ったアイデアを出すことのできる能力
自己	個人的実行力	自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力
	内的価値	物事を自分の価値観で判断し、情熱・才能・知識・人脈・人格・目的の要素から分析できる能力
	ヴィジョン	将来、自分がどのように成長していきたいかなど、未来の目標を明確に持つことのできる能力
	自己効力	何らかの課題に直面して、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力
	成長	どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力
	興味	自分が知らない・興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力
他者	耐性	困難な状況であっても、自分で決めたことは最後までしっかりとやり抜くことのできる能力
	感情コントロール	負荷が掛かる状況であっても、自分のストレスを自分自身でコントロールすることのできる能力
	決断力	自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力
	表現力	自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力
	共感・傾聴力	相手の話を真剣に聴き、相手を深いレベルで理解、相手の気持ちを尊重することのできる能力
	外交性	たとえそこが未知の環境であったとしても、自ら進んでその環境に飛び込むことのできる能力
	柔軟性	変化への対応力とともに、その場その場で機転を利かせて行動を適宜修正することのできる能力
コミュニティ	寛容	自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力
	影響力の行使	他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力
	情熱・宣教力	揺るぎない情熱をもって自分の考えを他者に広め、それを納得させることのできる能力
	組織への働きかけ	目標を達成するためにチームワークを高め、前向きな雰囲気を作り出すことのできる能力
	地球市民	自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力
	組織へのコミットメント	組織の目的や目標を正しく理解した上で、その実現のために真剣に動くことのできる能力
	誠実さ	どんな状況であっても、周囲に正しい行いをするように働きかけることのできる能力

3. 進路・キャリアを探究するという考え方

キャリアとは、ラテン語 *carraria*(車道“進んできた道”)を語源とし、「生涯にわたる役割の発達」と定義(Donald E. Super)されているため、人生全体における役割(学習者、児童・生徒として、親として、職業として、市民として など)と経験の積み重ねによってつくられます。時間軸で見ると「これまで」+「現在」+「これから」を含む“道そのもの”ですが、終身雇用モデルが弱まり、一本道の「キャリアパス」よりも、複線型・越境型が増えているリスク社会(Ulrich Beck)においては、安定したルールは保証されていません。だからこそ、高校生の段階からキャリアデザインとキャリア形成が重視されるわけです。

キャリア(生き方)に必要な4つのキーワード

キャリアデザイン 自分のキャリアを主体的に設計すること

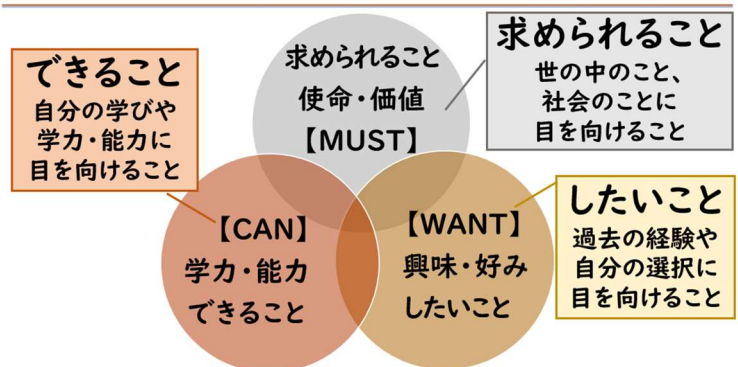


キャリアデザイン (career design)
将来を見据え、自分の価値観や強みを踏まえ、設計図を描くイメージ。特に、予定通り進む前提ではなく、変化に適応する設計、キャリア・アダプタビリティ(変化対応力)が鍵とされています。

キャリアプラン (career plan)	キャリアパス (career path)	キャリア形成 (career development)
具体的な行動計画。1年以内に〇〇資格取得、〇歳までに△△ポジションなど。デザインが構想レベル、プランは実行レベルと整理できます。	組織や業界における昇進・異動の道筋。学校や会社側の制度設計的ニュアンスが強いため、個人の視点よりも「構造」の視点が重視されます。	キャリアが形づくられていくプロセス。偶然・選択・環境・能力発達が絡み合う動的な過程。「キャリア教育」はこの形成を支援する営みです。

キャリアデザインは、3つの輪を上げると可能性が拓ける

キャリアデザインは、できること(Can), やりたいこと(Will), 求められること(Must)の3つの円を拓けることで選択肢が増え、この3つの円が重なる領域が「持続可能なキャリア」と言えます。子どもの頃は「やりたい」が強く、学生は「できること」、中年期は「求められる」が重くなり、熟年期は再び意味に向かうなど、人生段階ごとにこのバランスは揺れ動くため、3つの円は固定図ではなく、時間とともに変形する“動く図形”です。例えば、次のイメージで整理すると

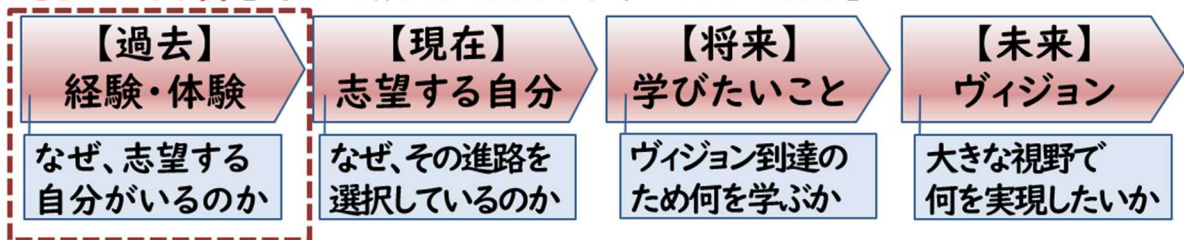


できる × やりたい = 自己満足になりやすい
 できる × 求められる = 安定するが燃え尽きやすい
 やりたい × 求められる = 理念は美しいが能力不足で挫折しやすい
 3つの円を拓げ、3つの円が重なる領域を探究、つまり、キャリアを探究することが大事です。

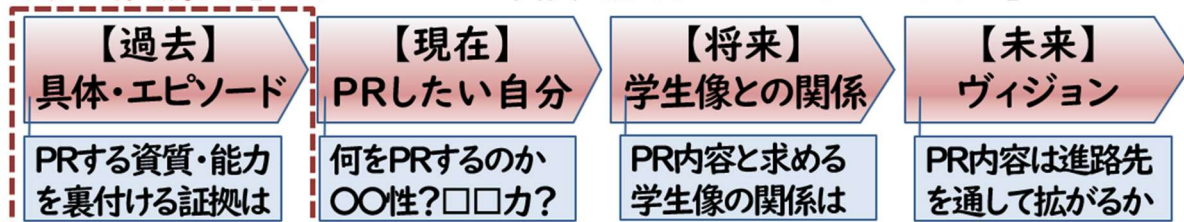
4. 志望理由書・自己推薦文を探究する

終身雇用モデルで、一本道のキャリアパスの社会では、「あなたはこういう〇〇だから、こういう学校・職業が向いている」とマッチング型の進路選択が有用です。しかし、複線型・越境型が増えているリスク社会においては、「人は職業を選ぶのではなく、経験を意味づけしながらキャリアを物語(ストーリー)として構築している」というキャリア構成理論(Mark L. Savickas)の考え方が重要になってきます。できること(Can), やりたいこと(Will), 求められること(Must)の3つの円を拡げ、3つの円が重なる領域を探究、つまり、キャリアを探究するためには、自身の経験を意味づけしながら、物語として再構成する必要があることを示唆しています。「自分は何者か」という自分像を育てるために、経験(過去), 現在, 将来, 未来という時間軸を重ねて考えてみましょう。キャリアは「見つけるもの」ではなく「構成するもの」です。

志望理由書【過去を踏まえた自分、未来に向けた自分】



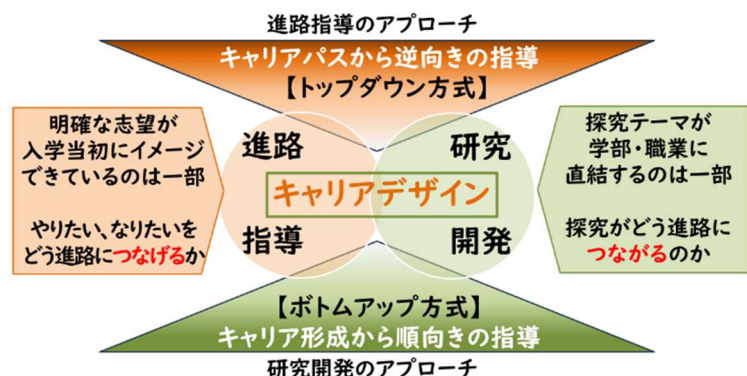
自己推薦文【自分のPRしたい資質・能力、エピソードをつなげる】



「〇〇になりたい, 〇〇に入りたいから□□をしたい」へ

ビジョンは、自分が目指す北極星です。そして、志望理由書はビジョン, 未来を語るもの, 自己推薦文はビジョンを実現できる人物である証明であり, それは自身の経験, 過去からしか作りだせません。成功, 失敗など経験を通して, 価値観をはじめとする現在の自分をどう形づかったのかという根拠の説明が重要です。現在の自分は, できること, やりたいこと, 求められることの3つの円が重なる部分です。現在の自分がビジョンを実現するために, 将来, どのような学校や職業を選択する, 進路選択(キャリアパス)するのが最適であるかを考えましょう。

そのためには, 次の進路先に進むことができる自分になるために必要なことを身につける**逆向きの考え方(キャリアパス)**だけでなく, 経験, 学習を通して, できること, やりたいこと, 求められることの3つの円を拡げ, ビジョンを**探す順向きの考え方(キャリア形成)**も重要です。その双方の考え方を組み合わせながら具体的な行動を計画する(キャリアプラン)ことが**キャリアデザイン**することにつながってきます。



5. キャリア・パスポートを通してストーリーを構築する

キャリアには、「自分は何者か」という自分像を育てるために、できること(Can), やりたいこと(Will), 求められること(Must)の根拠となる, 経験(過去)を意味づけしながら物語(ストーリー)として構築していくことが重要です。そのためには, 生徒自らが記録し, 学期, 学年, 入学から卒業までの学習を見通し, 振り返りとともに, 将来への展望を図るキャリア・パスポートの活用が有効です。キャリア・パスポートの定義と記載事項を確認のうえ, 十分な活用を図りましょう。

キャリア・パスポートの定義【学習指導要領及び学習指導要領解説特別活動編】

児童生徒が, 小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について, 特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として, 各教科等と往還し, 自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら, 自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。

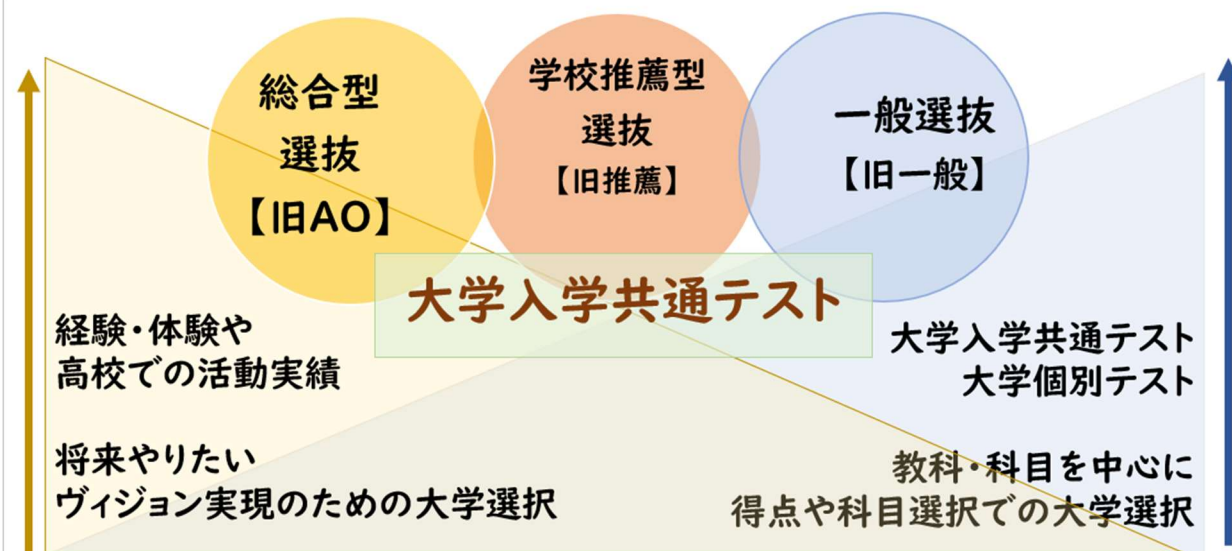
キャリア・パスポート記載事項

	学籍番号	氏名
キャリアデザイン	【過去】経験・体験	【将来】学びたいこと【現在】志望する自分
	【現在】志望する自分	【未来】ビジョン
①コンピテンシー		
資質・能力	成長できたコンピテンシー	成長させたいコンピテンシー
	成長・意識した場面、機会	成長・意識したい場面、機会
②学習への取組と振り返り		
学習	授業への取組	家庭学習等への取組
	良かった点・力を入れた点	良かった点・力を入れた点
③探究活動への取組と振り返り		
探究活動	ウェルビーイングの視点	
	1年ロジックリサーチ	1年プレ課題研究
	良かった点・力を入れた点	良かった点・力を入れた点
	2年課題研究	3年課題研究
	良かった点・力を入れた点	良かった点・力を入れた点
④特別活動への取組と振り返り		
特別活動	生徒会・委員会・係	学校行事
	良かった点・力を入れた点	良かった点・力を入れた点
⑤部活動への取組と振り返り		
部活動	部活動	部活動
	良かった点・力を入れた点	良かった点・力を入れた点
⑥諸活動への取組と振り返り		
諸活動	ボランティア活動	インターンシップ
	英検	その他特別活動
	資格取得(英検除く)	海外留学、海外経験
⑦探究活動での連携状況		
探究活動	探究活動連携機関①	探究活動連携機関③
	探究活動連携機関②	探究活動連携機関④
⑧特別活動の記録		
特別活動	生徒会	委員会
	クラス係	部活動
	出場実績・表彰①	出場実績・表彰②
⑨ボランティア・インターンシップの記録・取組と振り返り、資格取得、海外留学等の記録		
ボランティア・インターンシップ	ボランティア活動・インターンシップ①	ボランティア活動・インターンシップ②
	その他特別活動①	その他特別活動②
その他特別活動	英検取得①	英検取得②
資格取得・海外	海外留学、海外経験①	海外留学、海外経験②

経験・活動歴を通して, どのように自分が変容したか, 成長したか振り返るように心がけましょう

6. 日本の大学入試制度「選抜方法」と「重視される評価軸」

現在、大学入試制度は総合型選抜(旧AO入試)、学校推薦型選抜(旧推薦入試)、一般選抜(旧一般入試)の大きく3つの入試区分で構成されています。大学入学共通テストは多くの大学の入試に活用されており、出題科目は、国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語・情報の7教科21科目で構成されています(最大9科目を受験)。



【どの選抜方式でも一定程度関わる共通の学力指標「大学入学共通テスト」】

日本の大学入試制度の選抜方法の違いは、「重視される評価軸の違い」と「各大学学部等の特色」という2つの観点で整理できます。図は、左から右に向かうほど評価の基準が“経験・活動”から“学力試験”へとシフトしていく構造をイメージしたものです。総合型選抜は、最も人物評価に重きを置く入試であり、何をしてきたか、これから何をしたいかが中心に評価され、学校推薦型選抜は、学校からの推薦と調査書(評定平均)が必要であり、人物評価と学力評価の両方をバランスよく評価される入試です。一般選抜は、最も学力試験を重視する入試であり、大学入学共通テストと大学個別試験の得点が評価される入試です。つまり、「大学入試は、経験・ビジョン重視から学力重視までの連続的な評価体系であり、どこに軸を置くかによって進路選択の考え方が変わる」と理解するとよいでしょう。

【キャリアデザインの視点、学問や大学・研究者、学会と自分をつなぐ】

キャリアデザインの視点から、やりたいこと、できること、求められることの切り口で、関連する研究者・研究機関・大学を探してみましょう。将来のビジョンに向かって進路選択することは、あくまでも数多くある手段の1つを選択することであり、目的ではありません。現在、自分ができるところにしばられて、早々に進路選択をすることもよい判断とは言えません。どのようなキャリアを形成していくか、色々な人との対話や自分自身を見つめる時間、情報収集と学びを大事にしてください。以下の流れで進路選択を考える習慣を身につけましょう。

- ①分野を「学問領域」に言い換える(日本十進分類法)
- ②分野を大学等の「学科」に言い換える(学科系統分類(大分類・中分類))
- ③分野を研究者につなぐ(論文・研究室)
- ④関連する研究者・研究機関・大学の候補を挙げる
- ⑤入試選抜方法(総合型・学校推薦型・一般選抜、出題科目、配点等)を検討する